ヒラメ放流技術開発事業（抄録）

石田　陽司・山添　喜教・小島　　博

ヒラメの栽培漁業の推進および技術の確立を図るため,平成元年度より放流技術開発事業を行っている。今年度は,徳島市勝浦川河口域をフィールドとし,放流直後のヒラメ種苗の動向を重点的に解明することにより,当海域における最適放流サイズを明らかにすることを目的とした。また,漁獲対象資源加入前後の移動範囲を知るため,元年度放流群（阿南市橘湾放流群）の一部（ディスクタグ装着群）についての再捕報告をとりまとめた。

1　中間育成

4月17日から本県栽培漁業センターで生産したヒラメ種苗18,000個体（平均全長32.6㎜）に,水産試験場内において陸上 FRP 水槽平飼い飼育による中間育成を施した。その結果,標識放流追跡調査に用いる種苗として,5月8日に当初予定数以上の約16,000個体（平均全長38.3 ㎜）が得られた。この群については病気等による大量へい死は見られなかった。また,同一ロットのヒラメ種苗20,000個体に,徳島市漁協の海面小割網を用いた中間育成を施した。その結果,7月17日に約3,000個体（平均全長 98.3㎜）が得られたが,これは当初の予定を下回った。7 月上旬に原因不明の病気が発生し大量減耗を起こしたことがその理由であった。

2　種苗放流追跡調査　Ⅰ（放流初期生態）

徳島市勝浦川河口域に,全長20㎜,30㎜,40㎜および100㎜の種苗を放流し,放流翌日より放流場所周辺において追跡調査（小型ソリ網試験操業）を行った。

前2群では放流後1週間程度までしか再捕が続かなかったのに対して,後2群では放流20～30日後まで再捕が認められ,全長 30㎜ と 40㎜ との間の放流初期減耗の大きさの相違が顕著であった。このことから河口域でヒラメの種苗放流を行う場合,少なくとも全長40㎜以上のサイズが必要であることが示唆された。

混獲物の中では,エビジャコ,アキアミ,アミ類,ヒメハゼが比較的多く,餌生物の面からみれば,ヒラメ種苗放流に適した場所であると考えられた。

3　種苗放流追跡調査　Ⅱ（漁獲対象資源加入後の移動,成長）

元年度放流群（阿南市橘湾放流群）のうち100㎜放流群（1989年7月放流,放流個体数約8,700個

体）について,漁業者からの再捕報告から移動分散,成長の様子を把握した。

放流年である1989年中の累積再捕率は3.7%となった。放流翌年である1990年中の再捕報告数は,報告のなかった1990年11月を除き概ね10例／月となり,経時的減少傾向は窺えなかった。漁具別にみると,比較的地先で操業する刺網・定置網による再捕が全体の94%を占めた。再捕の範囲は,徳島市沖から椿泊周辺まで広がったが,海部沿岸へは広がらなかった。また,全再捕の89%が放流海域である橘湾内でなされ,橘湾内に放流した場合,放流後1年半が経過してもその大部分が橘湾内に居残ることが明らかになった。

漁業者の報告からみると,全長100㎜サイズで放流した場合,放流後約1年で25㎝前後に成長することがわかった。

放流後約1年6カ月を経過した1990年12月末日現在の再捕率は4.9%となった。

なお,詳細は平成2年度放流技術開発事業報告書（ヒラメ班）瀬戸内九州海域を参照されたい。